



揚州周延直

武藏國比多摩郡

初編下



芳川春濤閣
岡本起泉終

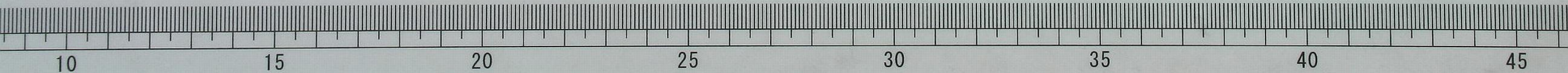
初編中



川上行義優雙言利話

鳥鮮堂壽梓

初編上

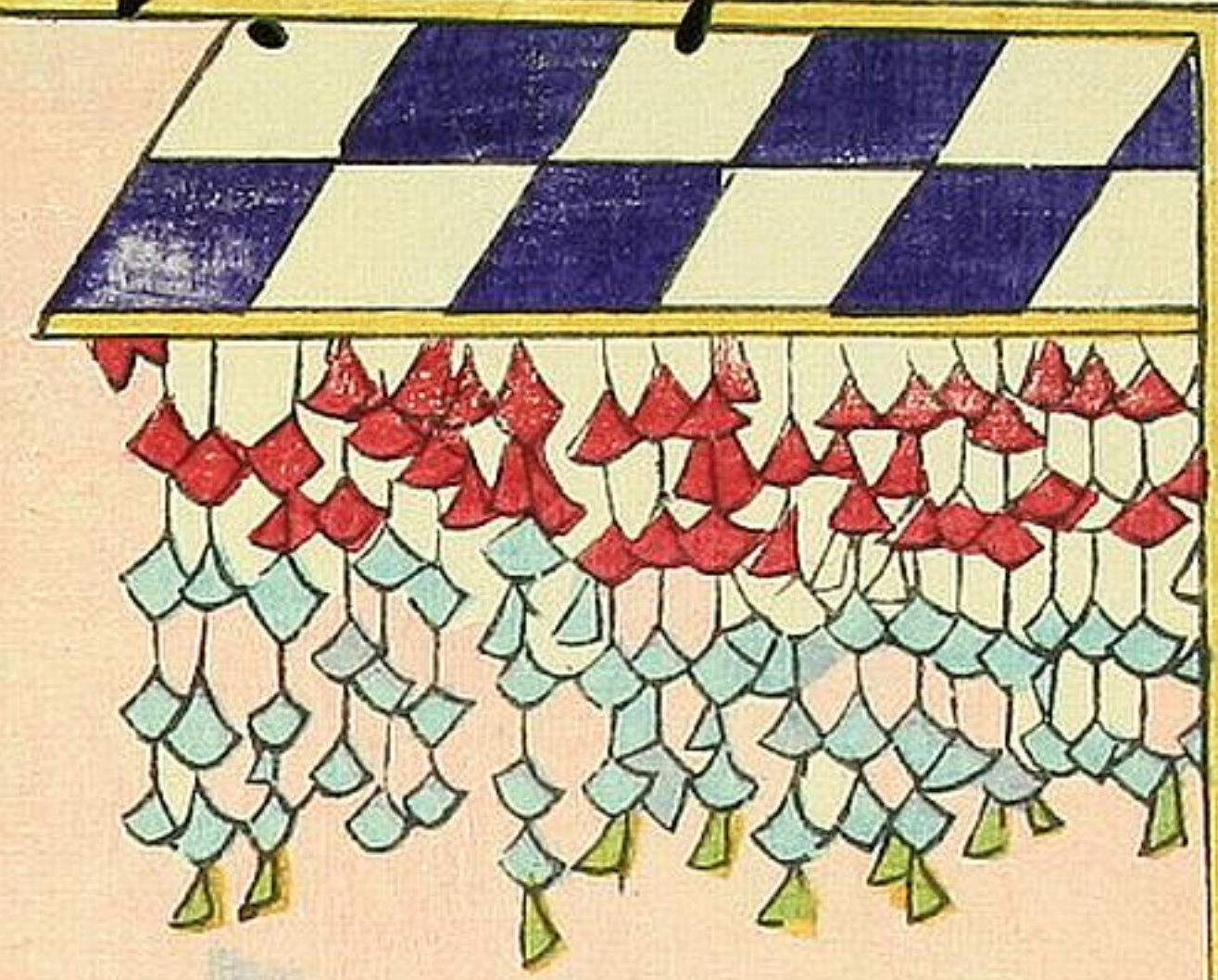




川上行義優雙言利話

島鮮堂壽梓

初編上



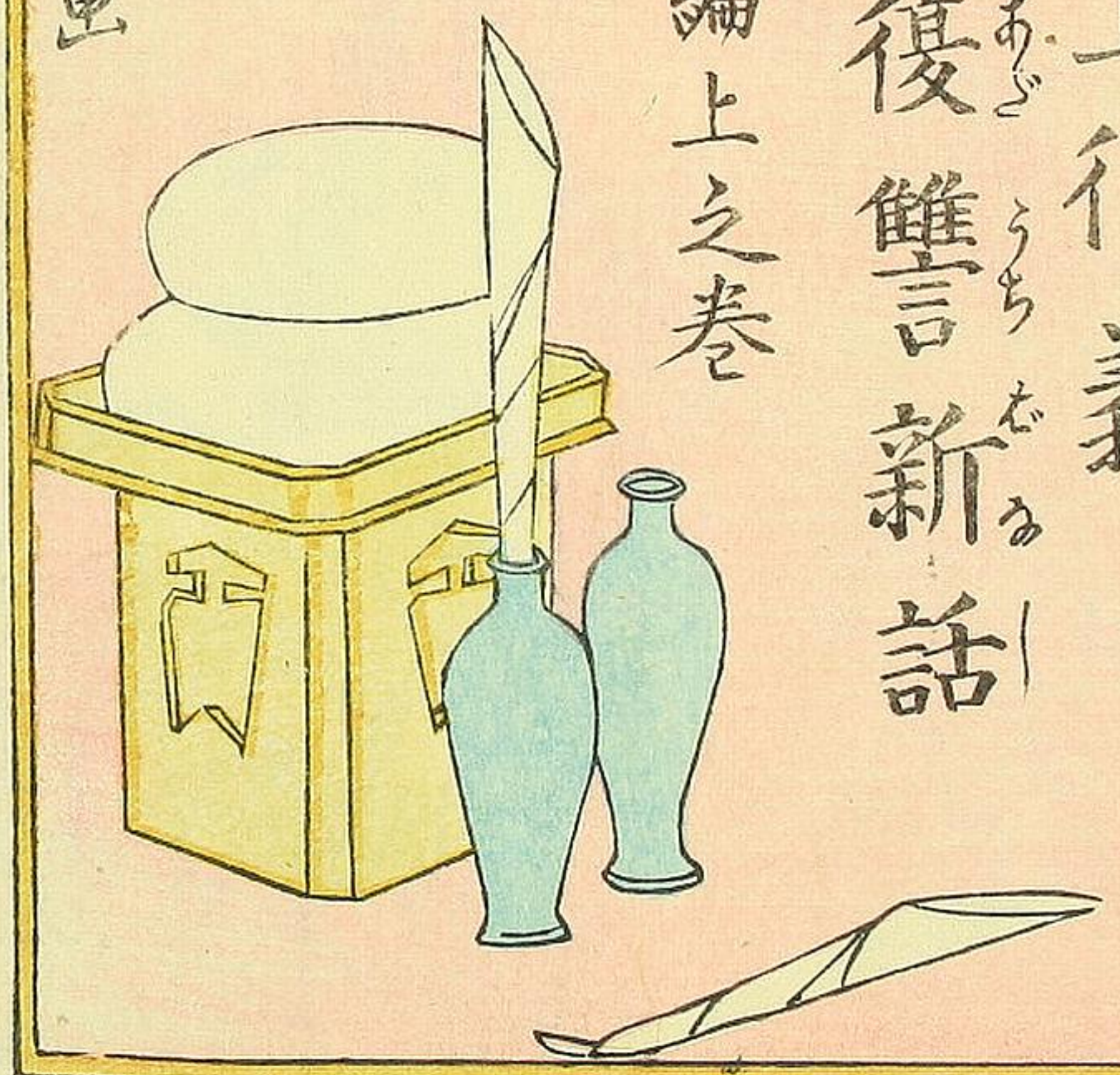
川上行義

復雙言新話

初編上之卷

高麗堂様

よー川春濤宛
園もと起る燈
揚海園の画



<48-8330>

狐が志を縮む處に哀しくも舊の庄屋が晴殺み出あひ鉄砲擡ぐ
無縁が怒りも堪むを仇と復せしといふ一巻の
地口好燈のめき法代りの珍らーと馬鹿
雅子の天鼓の音より言き評判と早くも
波付て島解半のさへ入るつゝのまゆ一番
ワドンと考弁後入冊子不終れと膝まをて
置きこそくとねむに何せ一も二もろくヨイ
ヨイくと起る子が法義新編の巻唯よ
一本おけとつそれと是犯るく先何通う助鉄砲
敵を釘ももまぐの儀と掛夢だけと手傳ふりまより



明治十四年睦月

芳川春濤題



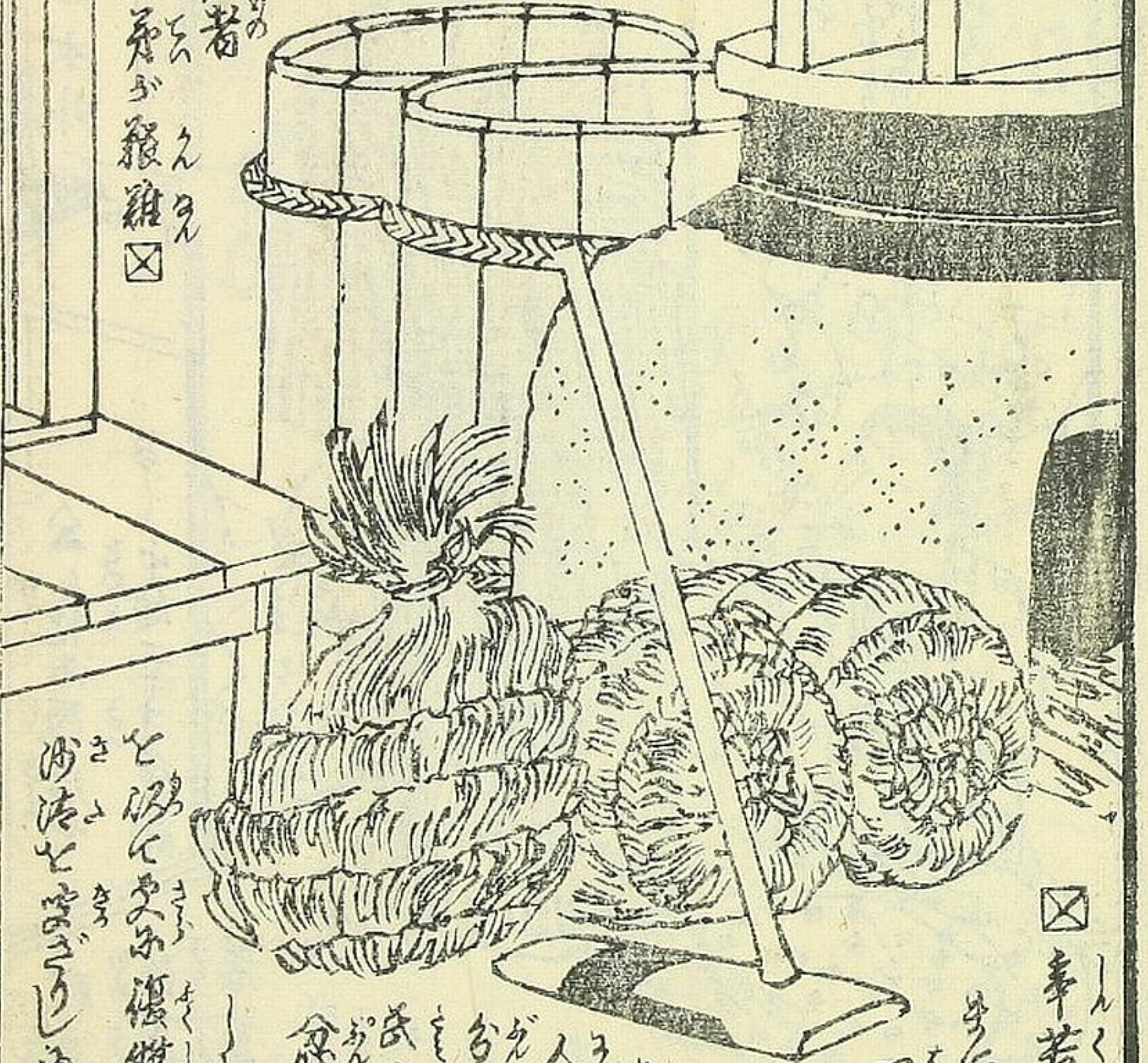


助左門長助
川上行義



○明治の治

ある君が時代
はれや氏の保
獲るものなり
明治六年の二月
天子小令して今後
不孝小玉親を害
せしむる者ハ速ニ
刑へ出せしと雖も
懲罰をせざるは
其後の不孝小玉者
多しありと相と不
孝が殺難



幸若さる

早倉
政府
み柱を
とある
人せ後
台とて
武の將
念を晴
たまる
と認め
沙流と
次へ

天明

十三年十一月十九日

の夜津奈川線下

武蔵野此ま摩

邪秋津村の

笹源村に

川上村

助成の父
助成の父が地元の
宗校敷直を本千代宗
と宗宗一頼宗ととの
借小後



日本外

△長男小源君と
その妻
ま〜十回二十才

長男
仍我ハ君七
農業を
以宗同
候竹を
しとせ
たんと
りふハ
ふと
たき
きき
きき
きき

夏小死さの川上助成の父と

別の同郡久米川村の舊

家ゆて

あるの

小伝切ある

同村ゆても

さる十年

とも初め村方の利

をを徳り小糸の者

恵と一ふまの人の

多教を

衰ふおまび

大儀ありとを村人の

川上村



△宗次郎とよ

宗次郎

仍小出

せしハ

昭治十年の事

中助の父

その時

次男豊長

小糸事

まの世内

後ハ同族に

今ハ世塵と

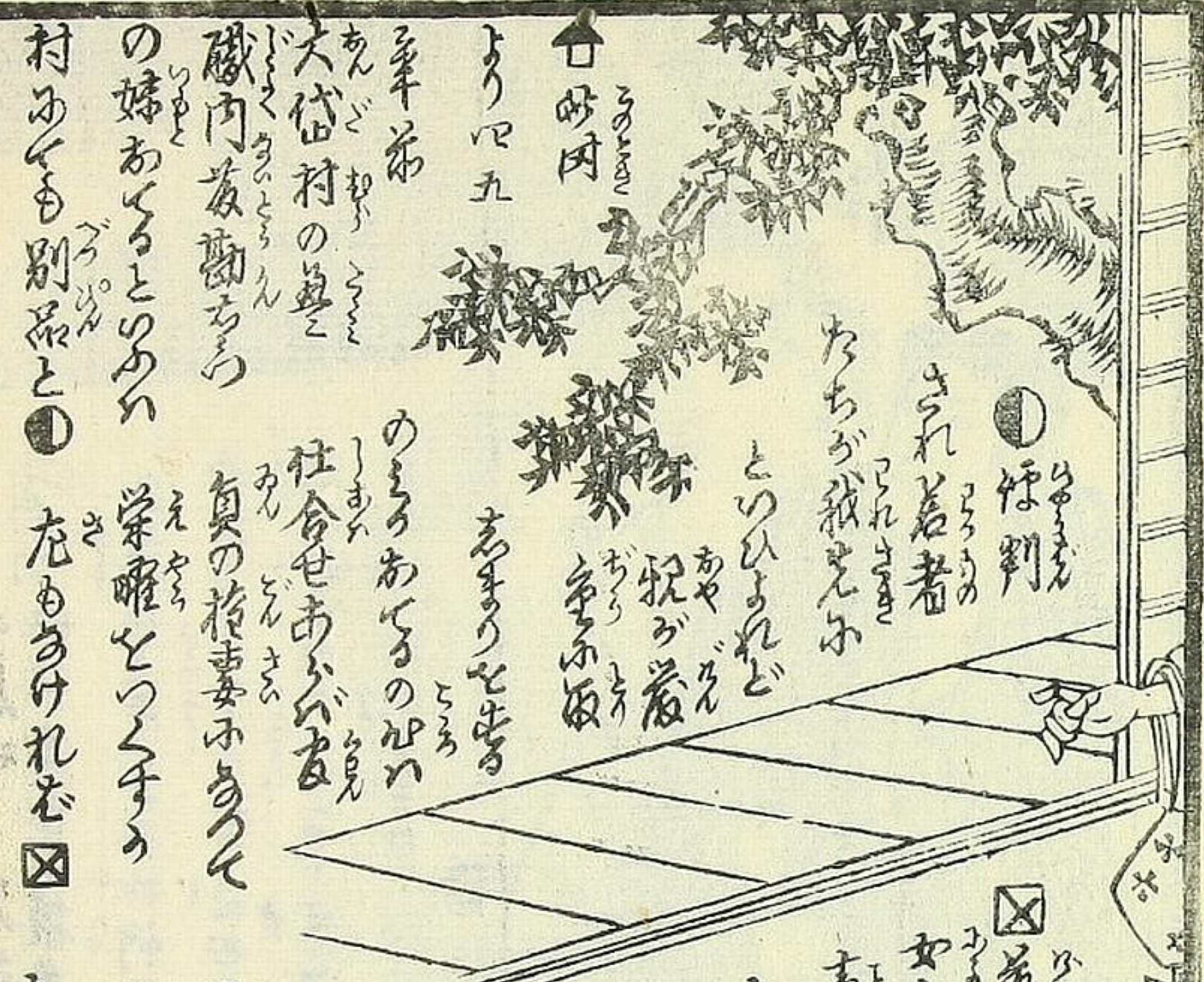
大

十分
の

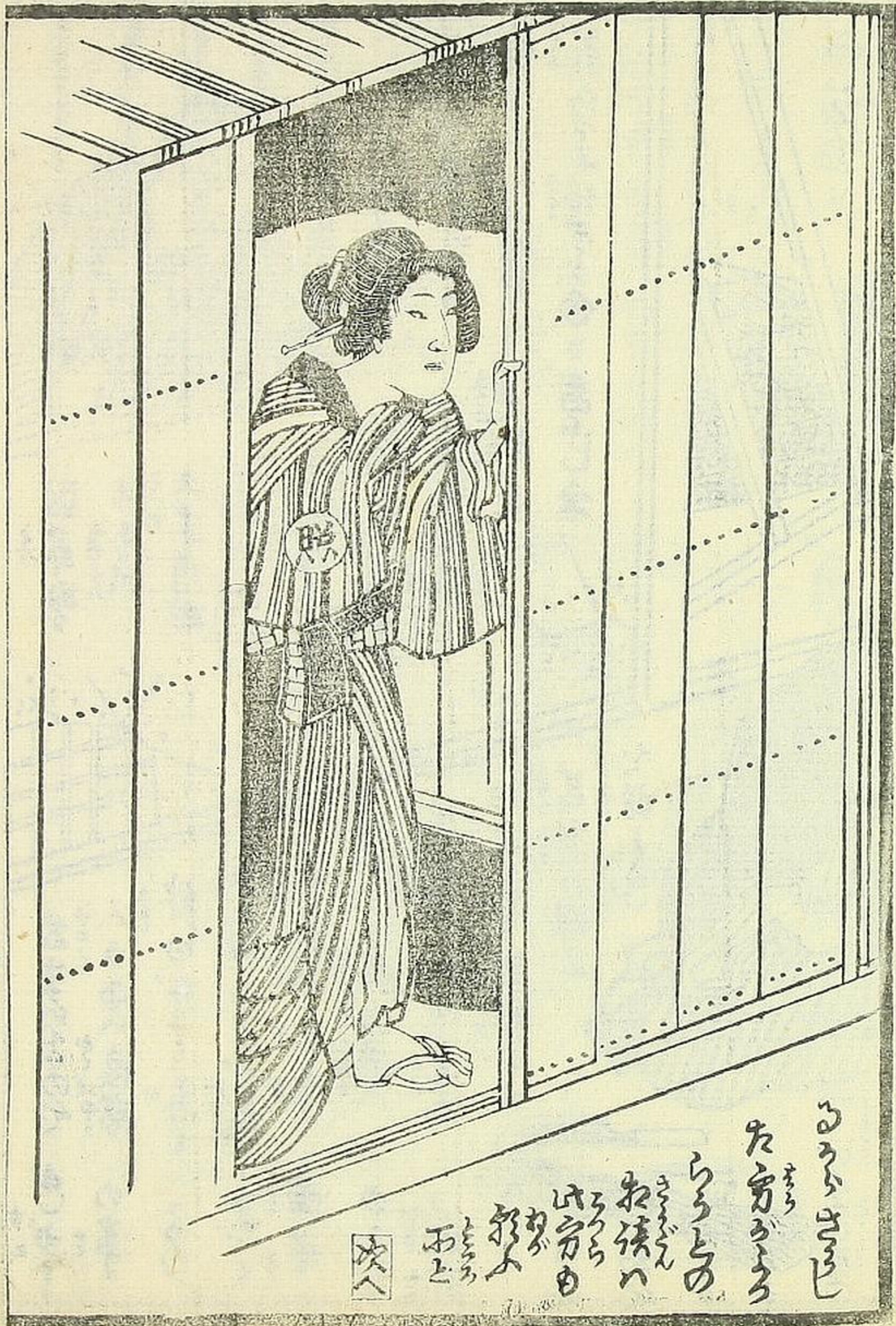
つぎ 悪くひはあ
 若老が要るに
 まるはと出まを密
 助を助のふねとふ
 へと帯ふユエと
 あらふれとのふその
 原因と尋ねると合



△△△のあると勤
 ちありの由まき
 ふありのい
 相好の口か
 あつとて探付
 やうとあふふ
 塚老の因縁
 伊とあふふ
 着て自ら
 が世帯の
 て秋津村
 のお板
 せし系
 府士族
 の母手代



△△△のあると勤
 ちありの由まき
 ふありのい
 相好の口か
 あつとて探付
 やうとあふふ
 塚老の因縁
 伊とあふふ
 着て自ら
 が世帯の
 て秋津村
 のお板
 せし系
 府士族
 の母手代



ついで

17

ちやうど
 たつた
 らうとの
 お供の
 けがら
 けがら
 雨と
 次人



川上社

西村造の権妻の
 おまひまのたの如何と勸
 めた大寺のあまのあま
 内持のあまのあまのあま
 とのあまのあまのあまの
 あまのあまのあまのあまの

事と信じたその
 婦人あまのあまのあまの
 事と信じたその
 事と信じたその
 事と信じたその
 事と信じたその
 事と信じたその

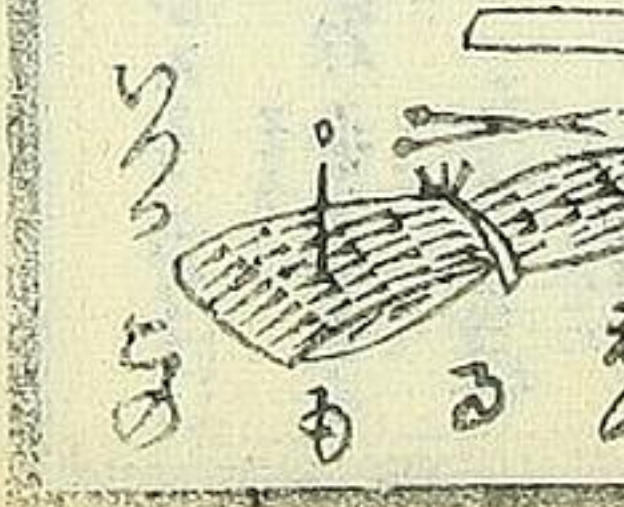
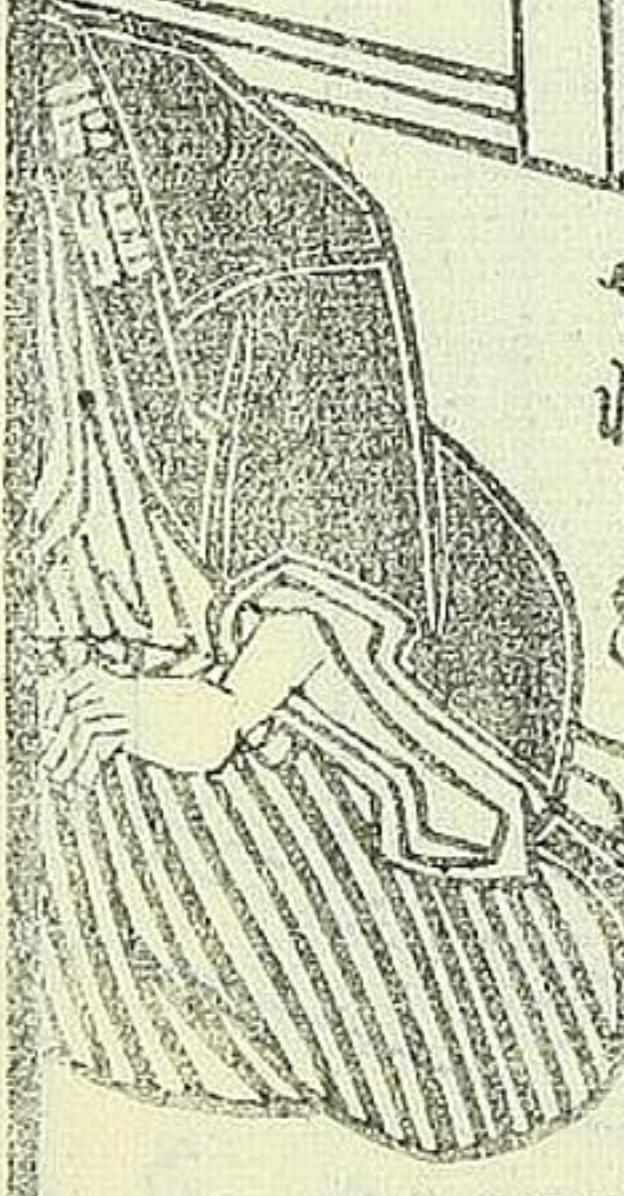
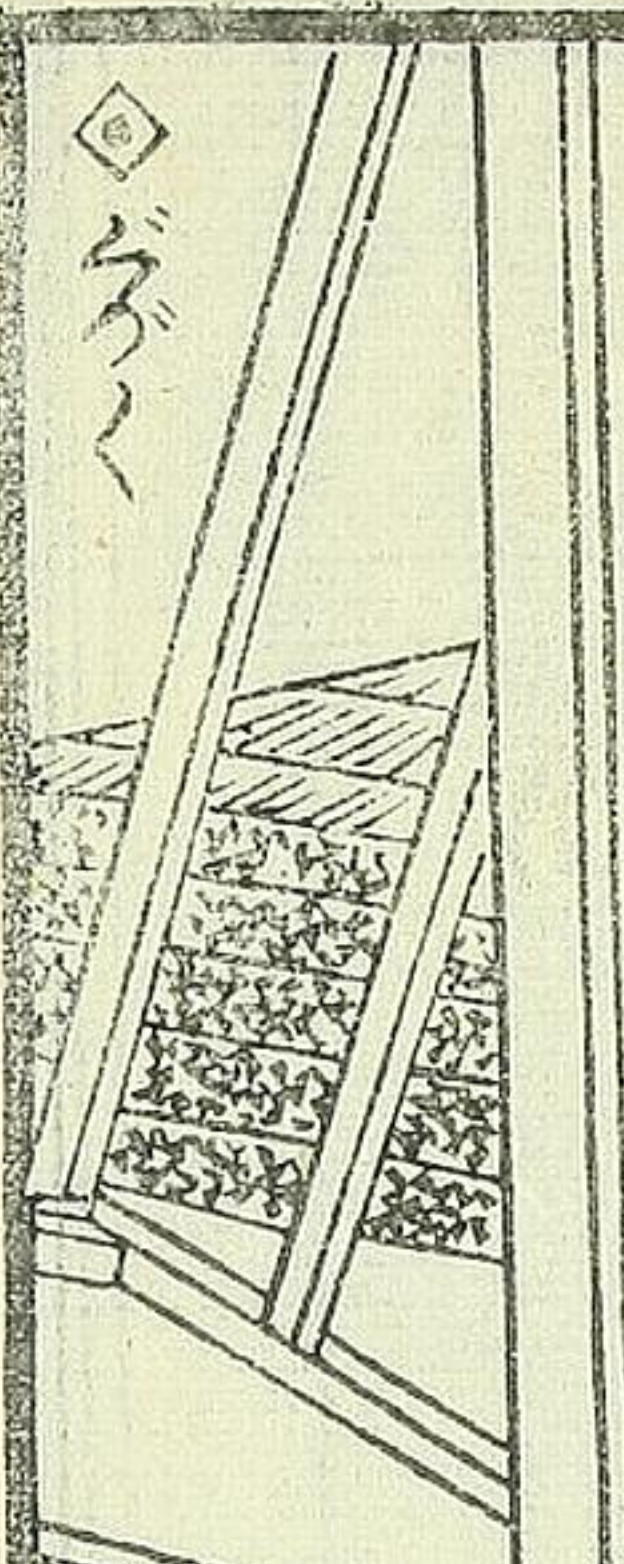
あまのあまのあまのあまの
 あまのあまのあまのあまの
 あまのあまのあまのあまの
 あまのあまのあまのあまの



ついで早速あつたふ
信守とあつたふ
若るふ何ぞや

と持ち近在
と郷と
あじふ

久末川村
お坂井
とのお徳徳あり
て四五人の分



△まつるの
人々西へ疫病
糸のどきく
母の泣く
白くお
うるより娘あ
大發せよまる
由ある道村の
若者の國
と

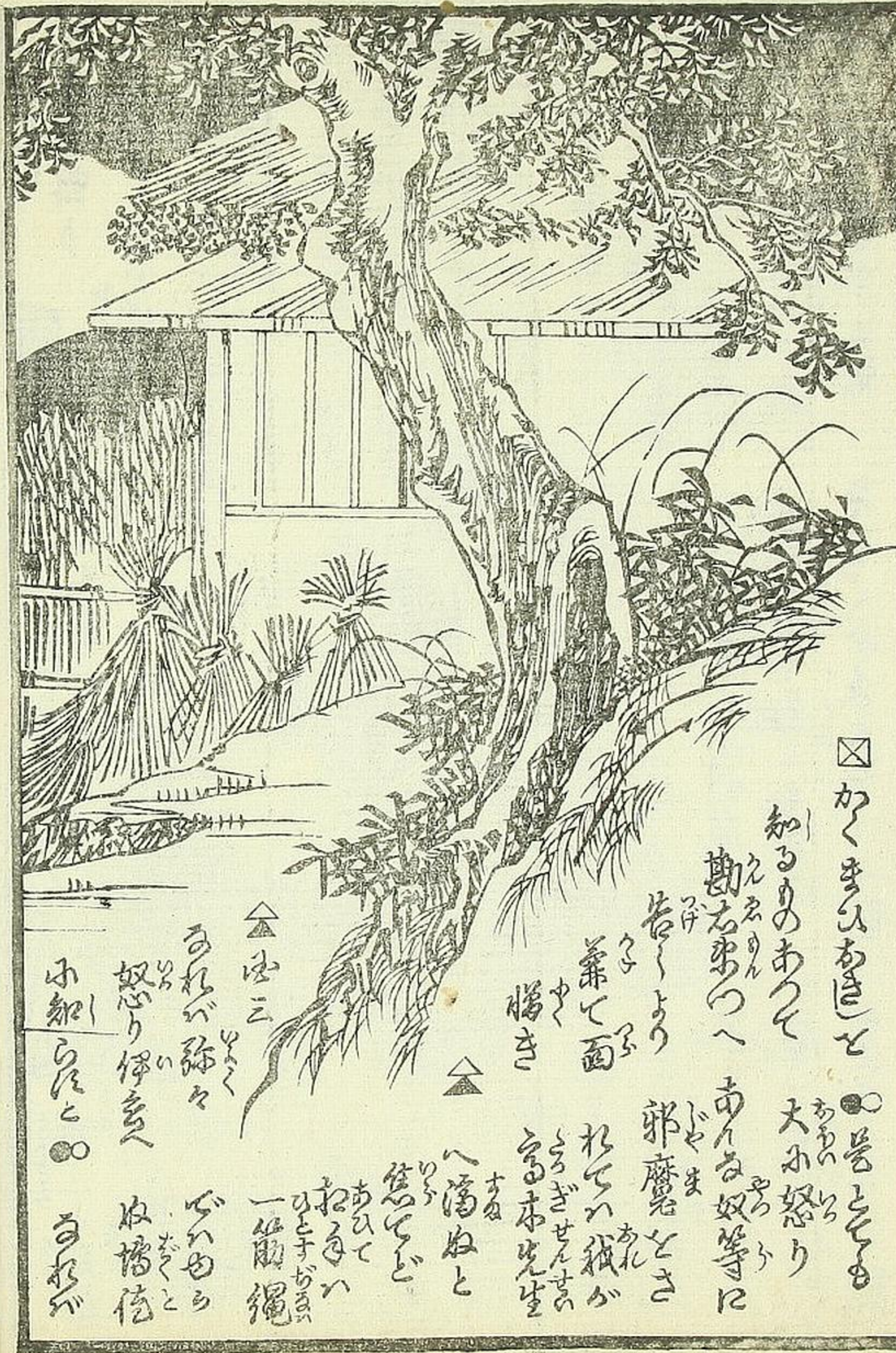
して登輝り
返事とせねど娘の
老とありひ千代と弟守へ
取組の首と若人あきそれ
支度とて人の四五日肉小
若日と探び態と祝儀の
若似とせんとの混雑
申あつたらふ若家
してつるえあつたり
若石の女婿のあつた
若夫とともぐらありと
若甘とあつたふぬぬ
若養とあつたふぬぬ



○ひひはて千代と弟
守へ日延と若とあつた
若とあつたふぬぬ

△まつるの
人々西へ疫病
糸のどきく
母の泣く
白くお
うるより娘あ
大發せよまる
由ある道村の
若者の國
と





かきまひあはせと
あわのり
大お怒り

知るあつて
勘定あつて
あんな奴等には

告ぐよう
兼て面
邪磨とさ

横さ
ねての横か
うきせんま
うきせんま

へ浦ぬと
あひて
おひて
ひとすぢま

あはれが跡々
奴等り俵さへ
一筋縄

小細らた
あはれか



つぎ

一伍一什

と傳りか
しへ出て来と

うの死んで
再び戻らぬ

不覚ゆゑとぞ
女房おしととらん

あしてあまふは

あはれ

あはれ
あはれ
あはれ

あはれ
あはれ
あはれ

あはれ
あはれ
あはれ

あはれ
あはれ
あはれ

あはれ
あはれ
あはれ

あはれ
あはれ
あはれ

あはれ
あはれ
あはれ

あはれ
あはれ
あはれ

あはれ
あはれ
あはれ

あはれ
あはれ
あはれ

010190517921

名所 細見 東京新圖

新形折本数品

皇國名物

色入小本数品

大日本皇國 物産のた

徳川年代雙六

滑 語 加 数 多

大晦日盛衰双六

小形 加 了 た 数 品

新形双六類品

龜 地本 錦繪 問屋

淺草五町十二番地
島鮮堂 綱島龜吉







芳川春濤
岡本起泉

初編中

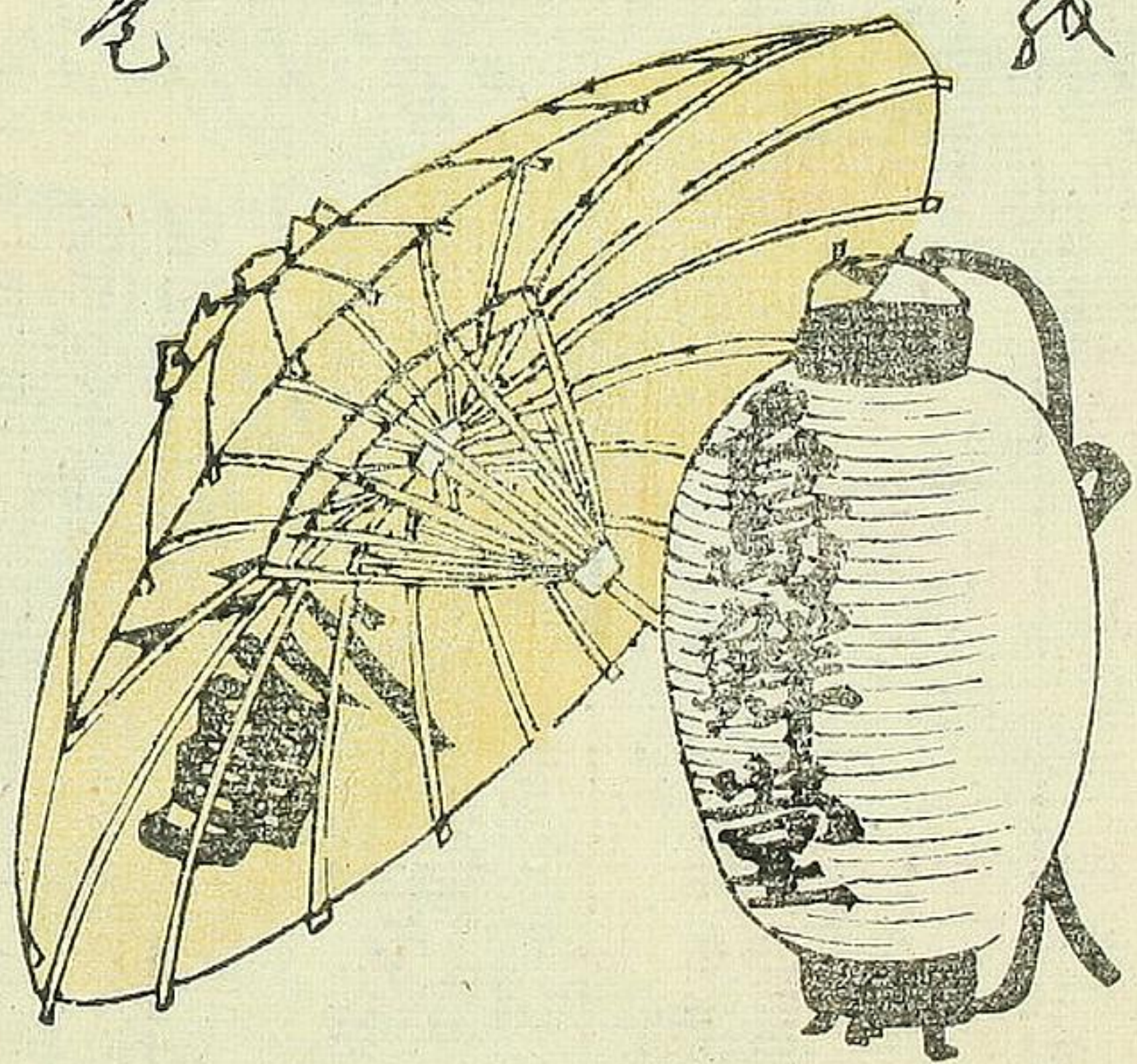
川
舟
の
儀

あ
ら
う
ち

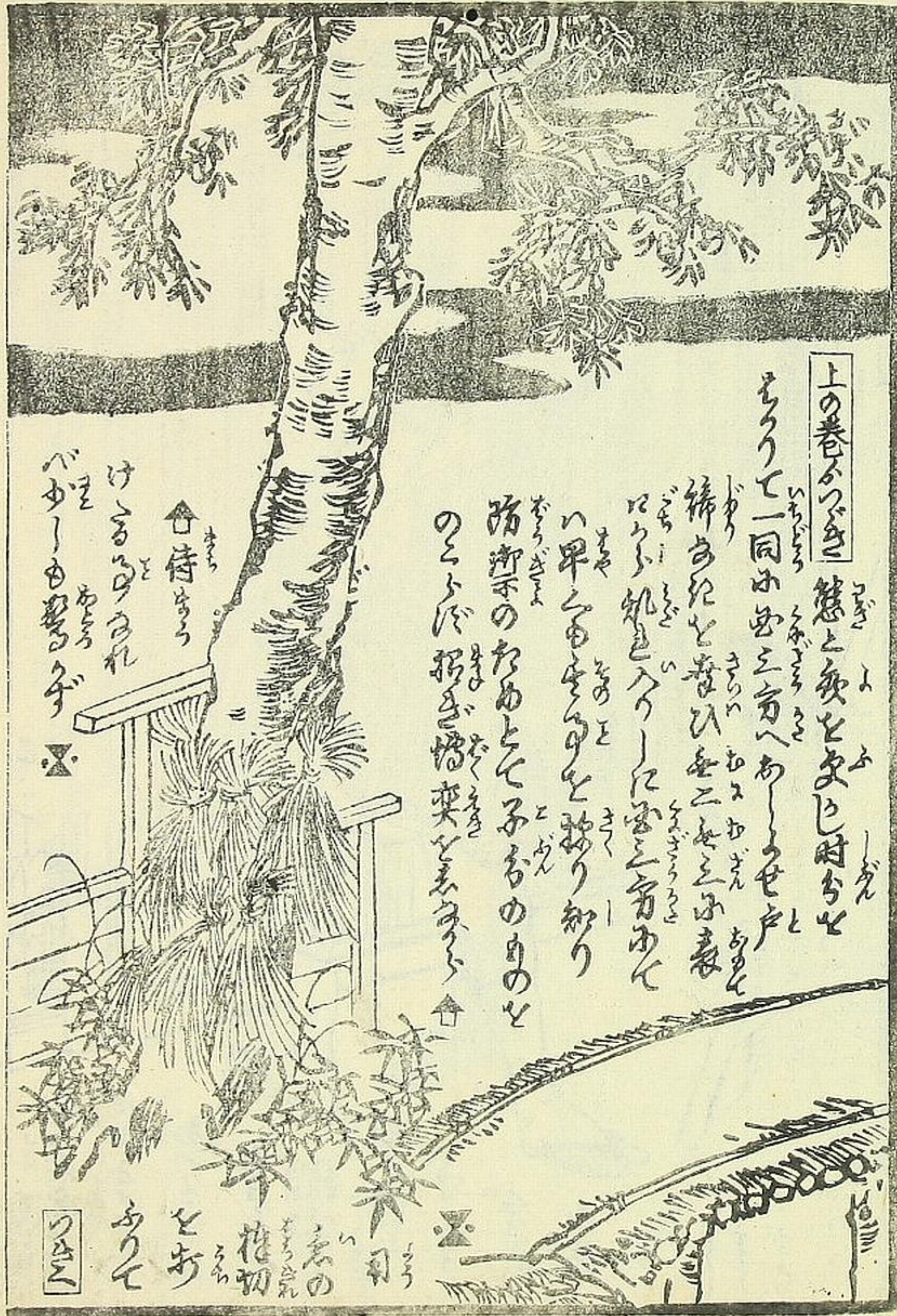
し
の
志

初
海

中
の
巻



<48-83317



上の巻のつぎ 慈と秋と交じり時ちせ
ちうて一同いぬと方へあしをせ戸

掃きかたをきひをこまにふま
はくしをいへりしにふと方あへ
い甲もをせゆを振り知り
防雨のたぬとてふちのものを
のこふは 掃きかたをきひをこまにふま

合侍
けさるるれ
はふしゆあふ

つみこ
ありて
とあ
推切
の
の



立向以積藉
 外とまがら由弱分ととせと

伊

郵

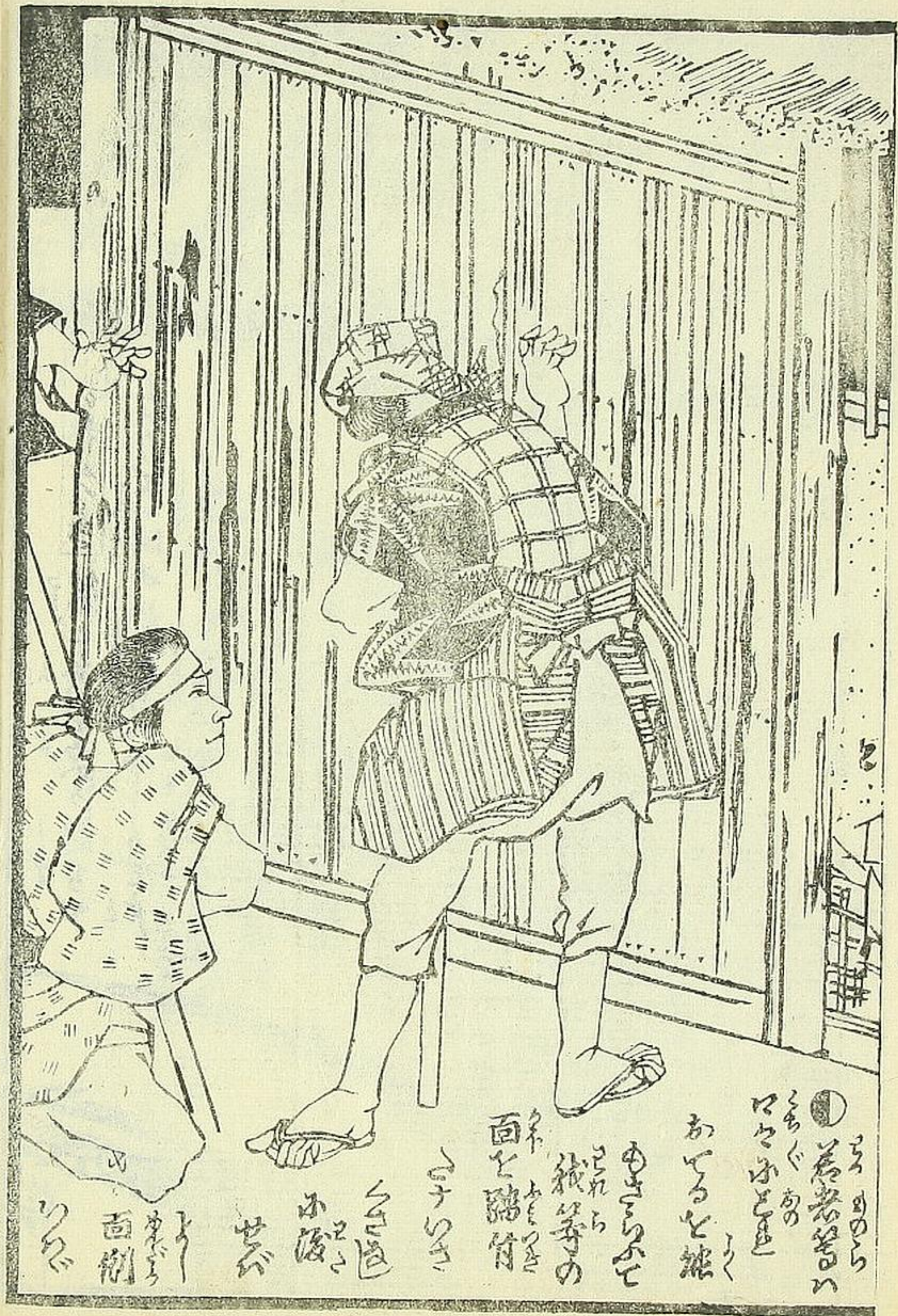
投ちし種を遠く
 て村外まで

村の
 如守とせ

ふんと息まき

り柳
 多
 柳

川上カ



着る者
 口をよとせ

あざとを結

物
 袋等の

面と踏付

ふすま

小波

せ

面糊

川上カ

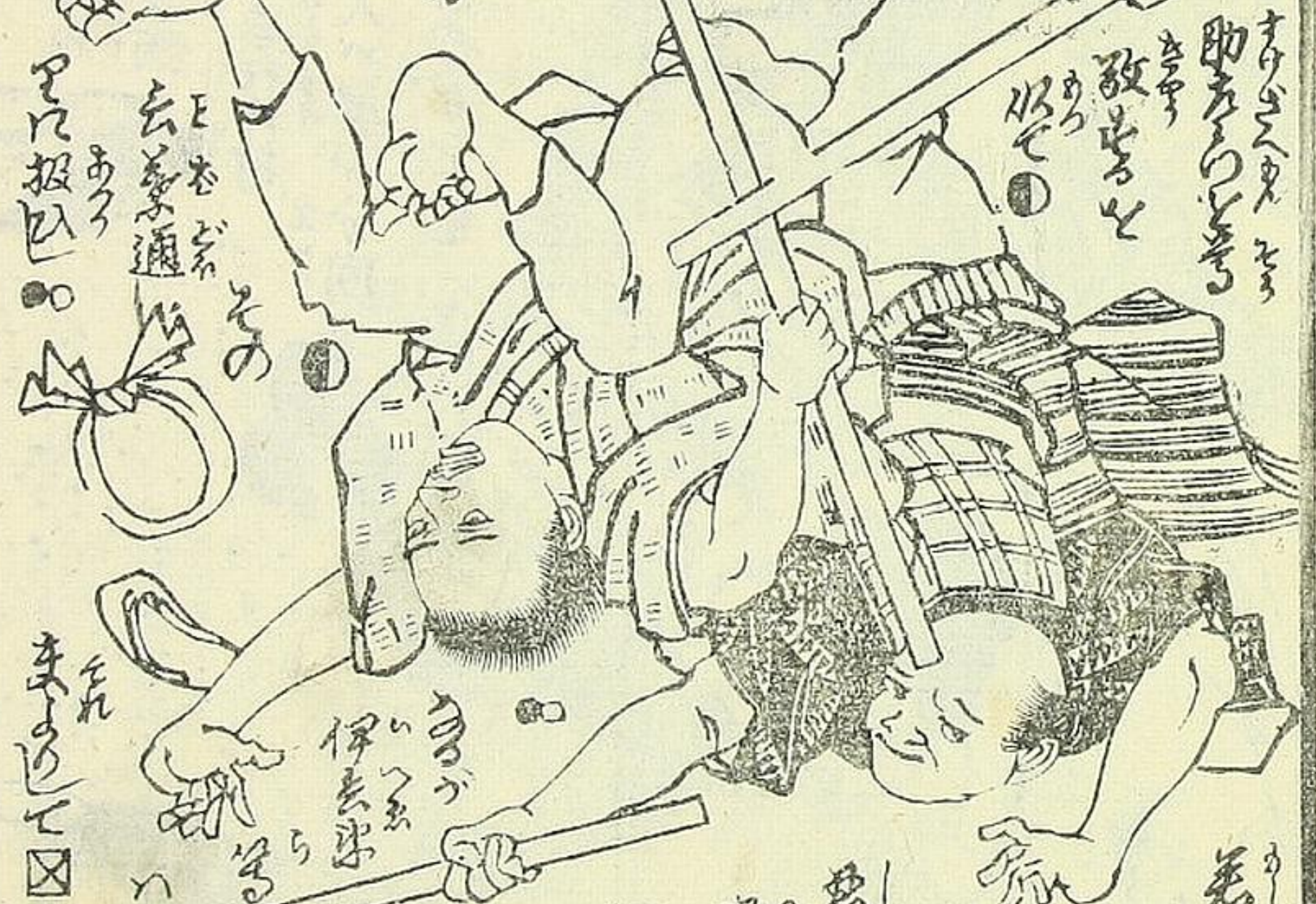
つぎに、お入道う
 かつ、助方あつた
 事ハ知らねど、何の
 國ニガ
 喧嘩
 ごと
 押さるゝ
 伊去来等々
 引取らぬ方の
 侍、と、まゝに
 役、と、まゝに
 捨くおけねば
 まより仲裁の



助方、お入道
 敵、と、まゝに
 伊去来、と、まゝに
 捨くおけねば
 まより仲裁の

助方、お入道
 敵、と、まゝに
 伊去来、と、まゝに
 捨くおけねば
 まより仲裁の

お入道、お入道
 敵、と、まゝに
 伊去来、と、まゝに
 捨くおけねば
 まより仲裁の



お入道、お入道
 敵、と、まゝに
 伊去来、と、まゝに
 捨くおけねば
 まより仲裁の



○わいあれど何事ぞ
 のもてあや
 の如張あつて
 風流めて
 下されと
 ねむりか
 まさえり
 助な衆のへ
 この町家内の
 のや他男と
 備ふ
 ひとしき遠く
 休樂を観の會

尋常の くるく又
 出のうとあふ
 宣嘩の揚玉へ
 老衰の
 出末ぬき
 小あつて
 取て又
 一がうら
 ぬゆき
 ちごうら
 近以遠感ゆき
 巡査へ寄つて
 結あつて方か



川上へ去りて
 車のはやと
 ときおまんもの
 とん利する
 若くは志き
 衣箱のふ
 夜中お苦着

箱をよめ
 二徳利を
 傾けよ
 ふりあに
 きしお
 まれお
 まさし
 おつて
 小あつて
 のころ
 外はあつて
 一徳利
 びりじが
 事か
 大事く
 あつて
 出末ぬき
 他村へ
 寄つて

010190517930



命之養生善悪鏡

一折本

教訓善悪図解

一折本

清誓名所

五十二神

巻物

小本形折本

徳川年代鑑

大功記銘傳

八冊

日本名所神社佛閣

巻物

五享歳

俳優忠臣藏

色入小本品々

色圖入單語圖解

魔島紀事

六冊

亀 地本問屋

浅草區瓦町十二番地 島鮮堂

網島亀吉







一のしり

ゆき義

後館

しら那志

初海下の巻

綱高板

<48-8332>



申すまじき 申すまじき 申すまじき 申すまじき 申すまじき

申すまじき 申すまじき 申すまじき 申すまじき 申すまじき

申すまじき 申すまじき 申すまじき 申すまじき 申すまじき

申すまじき 申すまじき 申すまじき 申すまじき 申すまじき

申すまじき 申すまじき 申すまじき 申すまじき 申すまじき

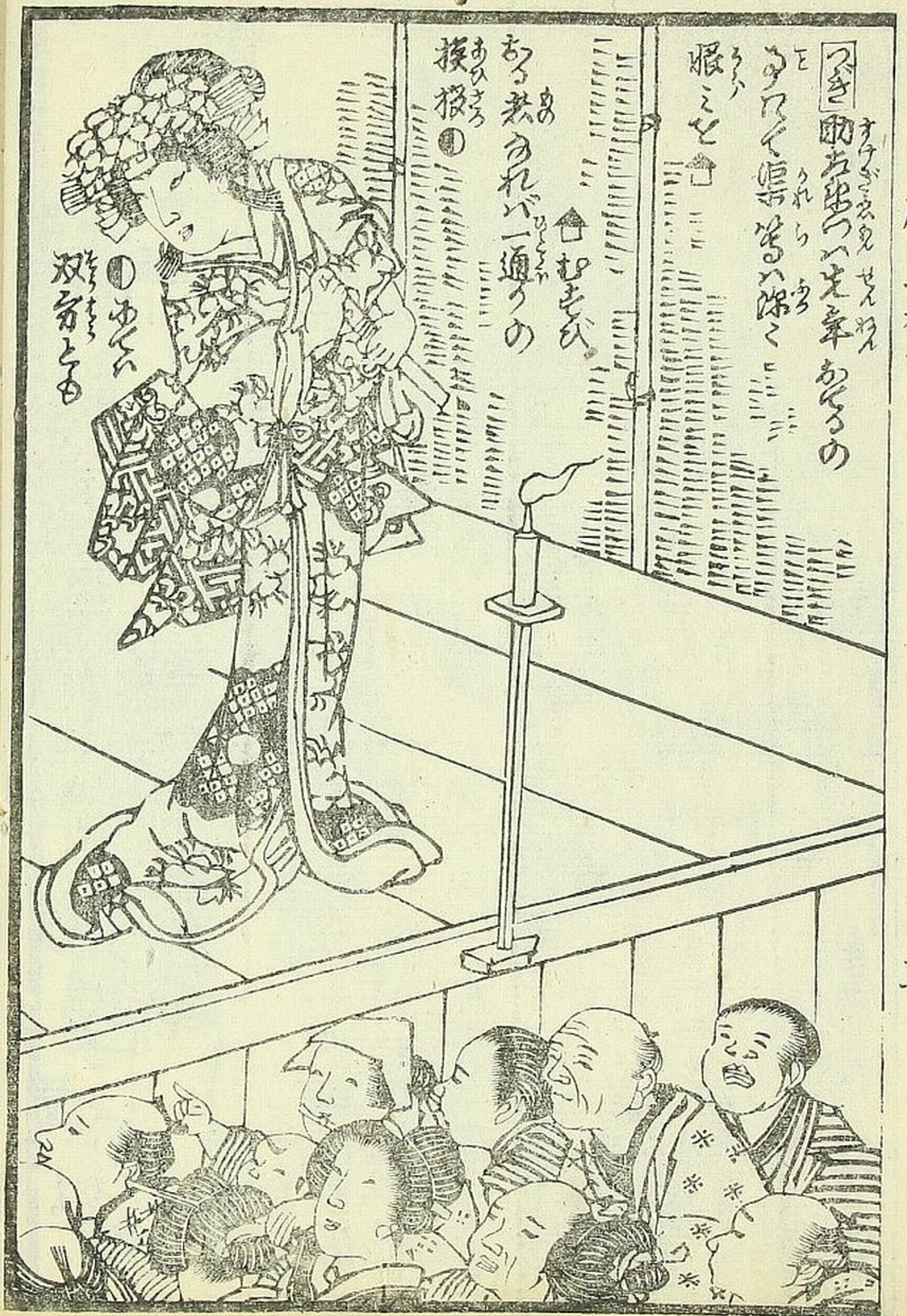
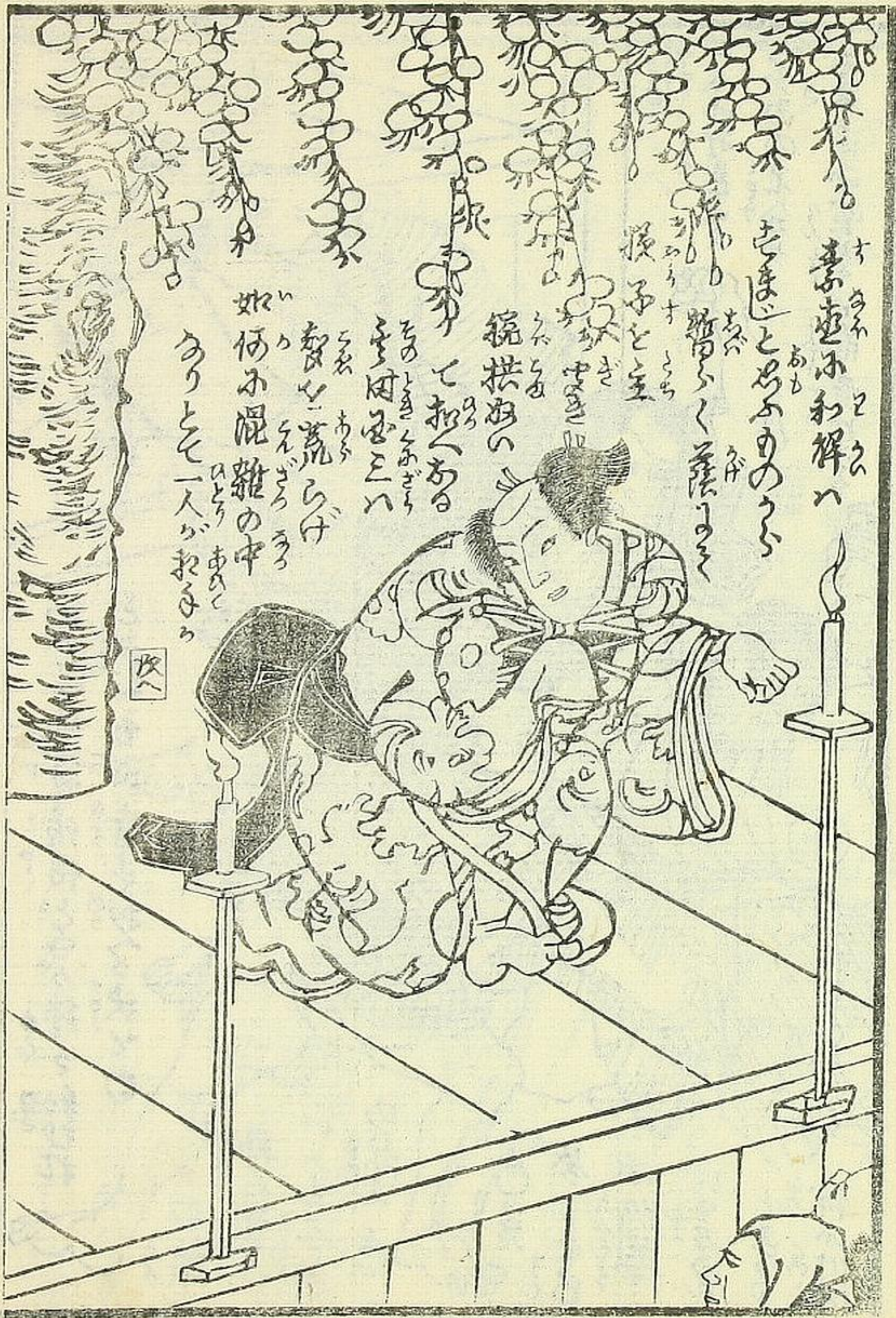
申すまじき 申すまじき 申すまじき 申すまじき 申すまじき

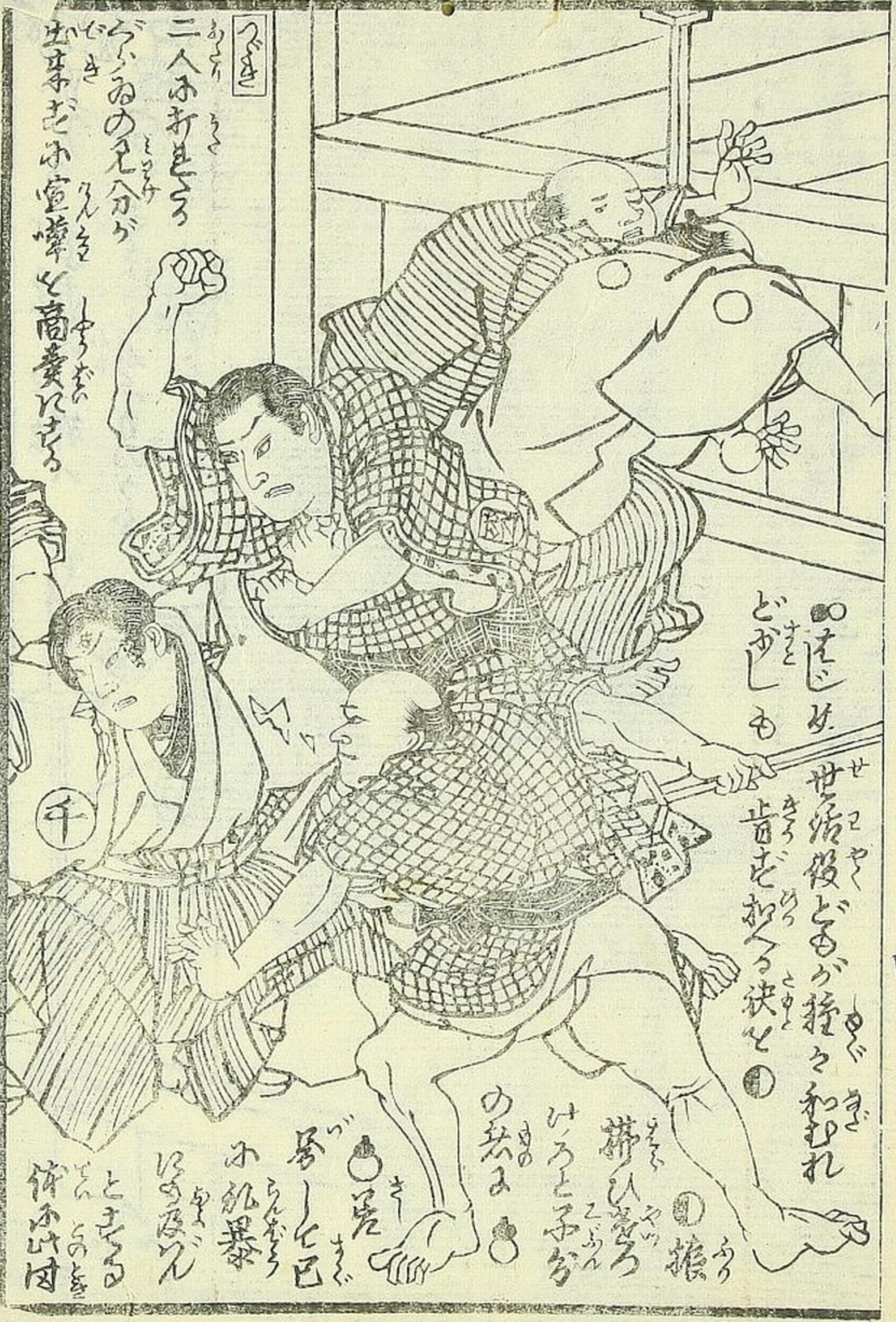
申すまじき 申すまじき 申すまじき 申すまじき 申すまじき

申すまじき 申すまじき 申すまじき 申すまじき 申すまじき

二六

三 次

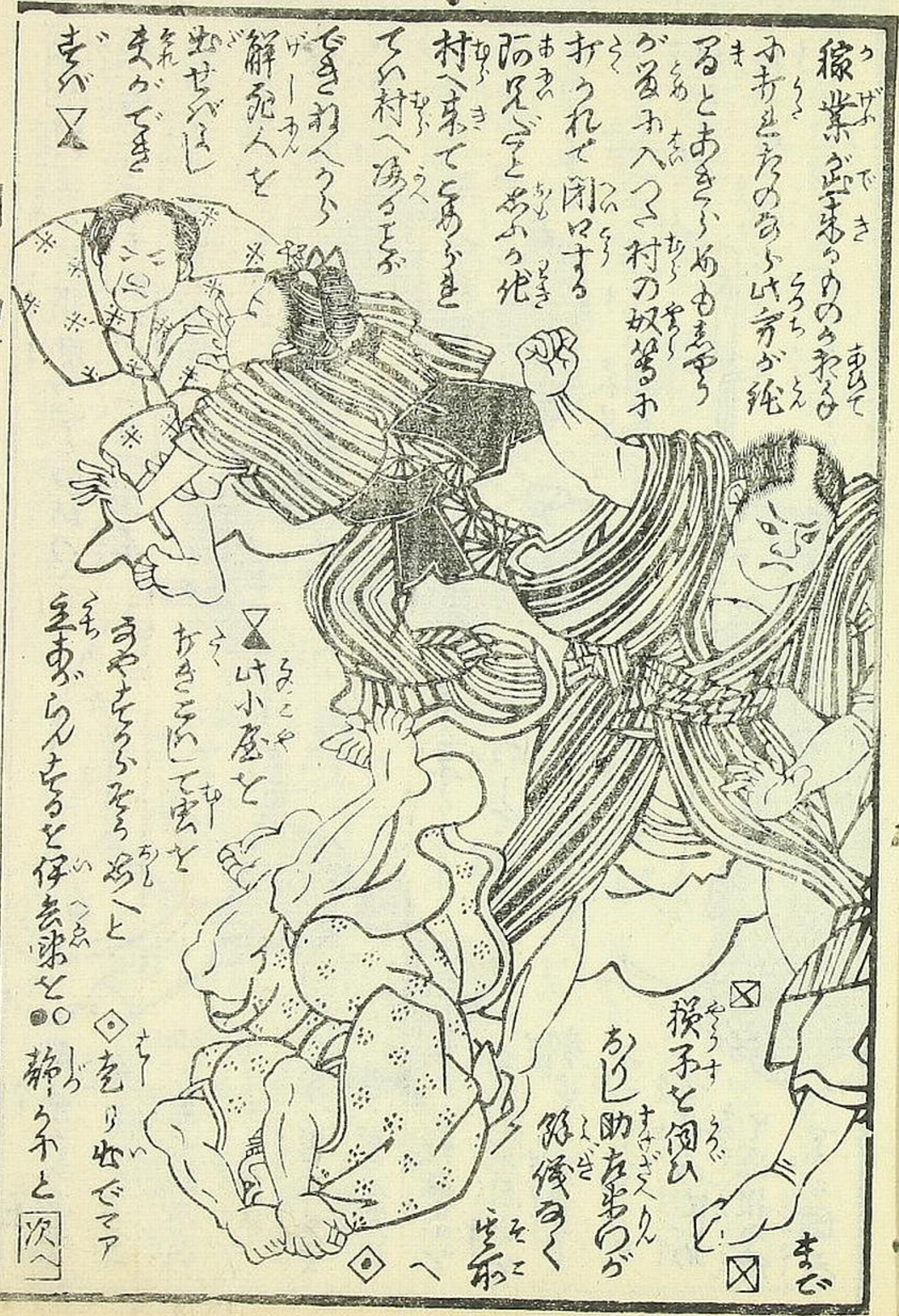




二人お打はらう
ぐらゐの元分が
出来ど小宣堂と高妻にさる

世にやくとむが種と和むれ
昔をおく決と

のそま
けろと子分
掛ひ
小松
とま
小松
小松
小松



稼業が世にやくとむが種と和むれ
昔をおく決と

のそま
けろと子分
掛ひ
小松
とま
小松
小松
小松



つぎ 花燈をまわすは花燈を不燃勢と

● 事ゆゑに花燈の
◇ 花燈は向
後天付村へ
其のいふ
其のいふ
今宵のうら
あはれ
櫻子のいふ
さしぬといふ
に侍らふ
勅
あ
も

あつとつとつとつとつとつと

困乏が苦業も持あ

のふかるといふぬ

ゆゑに方々

まへへゆてと

ほろほろと

あ互いにお祈りの

ある今宵のゆゑ

双方とも大夏

小まひて

根もあも



振

中

と

と

と

と

と

と

と

と

と

と

△ 畢

△ 起

△ 起

△ 起

△ 起

△ 起

△ 起

△ 起

△ 起

△ 起

△ 起

あつと

あつと

あつと

あつと

あつと

あつと

あつと

あつと

あつと

あつと

あつと

あつと

△ 起

△ 起

△ 起

△ 起

△ 起

△ 起

△ 起

△ 起

△ 起

△ 起

△ 起

△ 起

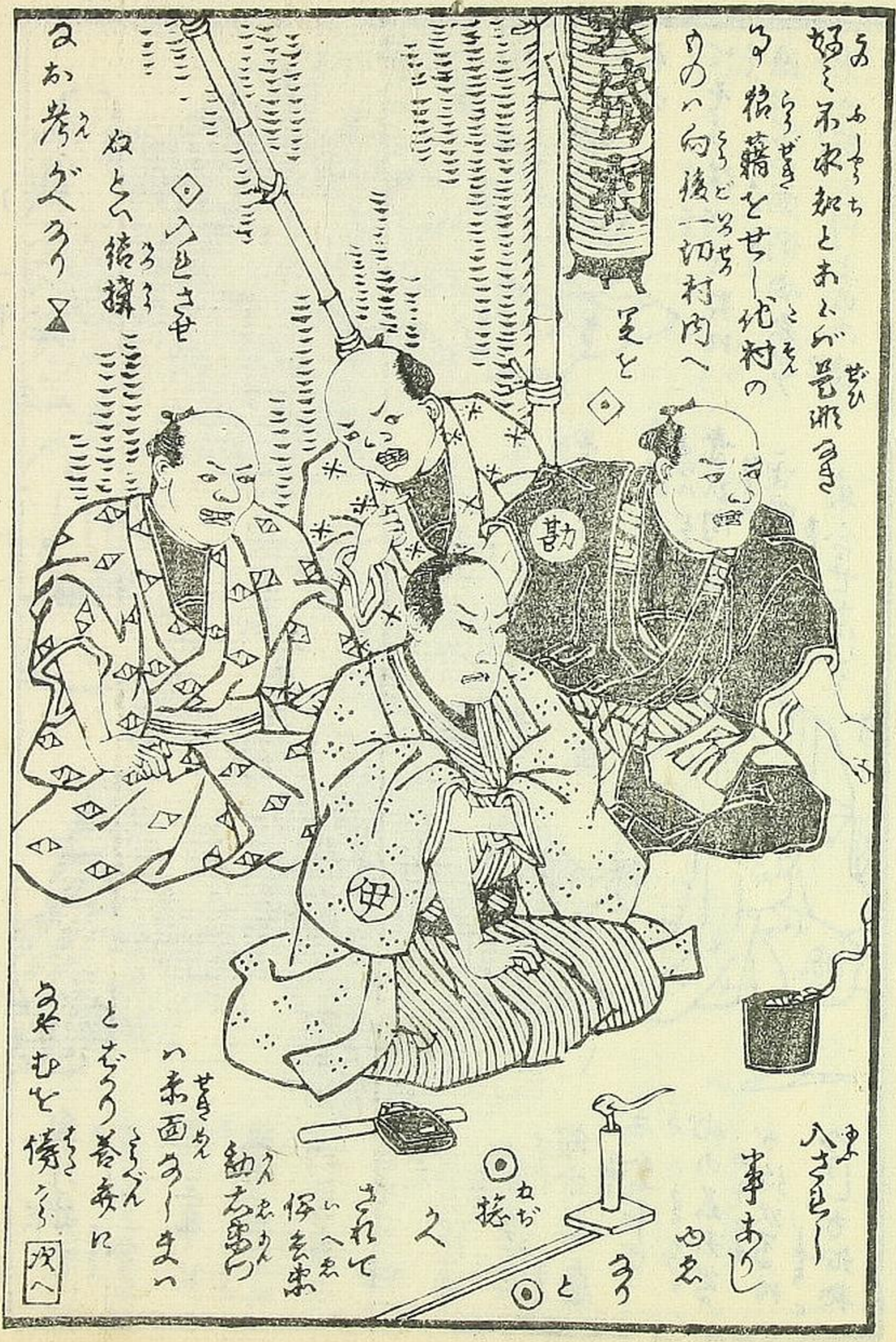


何れも得ぬ事
 致と云ふ原振ひ用出
 たくも物にせんと欲
 するが足下等が事と

秋久米川
 村へ一生足
 と踏とらぬと
 いふ証書と

足下等
 さすべられむ
 足下等

ありまの
 足下等
 お二人へ
 足下等
 程不を
 五二う之知



何れも得ぬ事
 致と云ふ原振ひ用出
 たくも物にせんと欲
 するが足下等が事と

秋久米川
 村へ一生足
 と踏とらぬと
 いふ証書と

足下等
 さすべられむ
 足下等

ありまの
 足下等
 お二人へ
 足下等
 程不を
 五二う之知

